

## 2009 (H21) 年度 卒業研究要旨

### 「X ジェンダー」についての一考察

大田 黒 花

現在の日本社会では、典型的な「女性」「男性」以外の性のあり方を認めていない。しかし世の中にはそうした典型的な「女性」「男性」に当てはまらない人びとも存在している。そのなかのひとつが「X ジェンダー」である。「X ジェンダー」は、心の性が「女性」「男性」に二分できない状態を指す。「X ジェンダー」の当事者たちは、自身の望む性のあり方を実現することがかなわなかったり、またかなったとしても社会とのあいだに摩擦が発生し、苦悩したりするのである。

「X ジェンダー」は、学術的な研究がなされていない。また、社会的な認知度も低い。それは同性愛者や性同一性障害といった他のセクシュアルマイノリティと比べても明らかである。そのため、当事者の抱える問題が社会的に認知されていない。そこで私は、この「X ジェンダー」の問題を「人権問題」としてとりあげるために、当事者たちを調査し、その実態を学術的に捉えなければならないと考えた。

また「X ジェンダー」が認知されることによって、多様な性のあり方を認める社会が認められるのではないかと考えた。同時に、「X ジェンダー」当事者が快適な生活を送るためには、多様な性のあり方を認める社会が成立しなければならない。よって、「X ジェンダー」の研究を通して、多様な性のあり方を認める社会の実現について、提言していかなければならないと考えた。

そのために、まず性の多様性について記した既存研究を振り返る必要がある。そこで第一章では、性の多様性と、その多様性を無視した性別二元制について、既出の書籍と論文を参考にして述べた。

身体の性、心の性、恋愛対象となる性、社会から要請される性—性はいくつかの要素から構成されており、その要素の違いが性のあり方を無限に生み出していく。典型的な「女性」であれば、身体の性と心の性が「女性」で一致し、恋愛対象となる性は「男性」である。しかし恋愛対象となる性が「女性」になれば、女性同性愛者（レズビアン）である。また、心の性が「男性」であり、身体の性に対して違和感をもつのであれば、それは一般に「性同一性障害」といわれている状態である。

このように、性のあり方は多様であるという実態が存在するにも関わらず、現在の日本社会は、典型的な「女性」「男性」以外の性のあり方を排除している。それは男女別のトイレや、戸籍の性別欄といった制度的なものから始まる。そして「女性は甘いものが好き」「男性は理系が多い」といった性差を生み出している。じつはそういった性差の大半は思い込みによるものだが、多くの人びとがそれに疑問を抱かない。しかし非典型的な性のあり方をもつ人びとは、性別二元制社会で生きていくうえで、社会との摩擦を感じている。

こうして非典型的な性のあり方のひとつとして、トランスジェンダーを挙げた。身体の性あるいは社会的に要請される性とは違う性へ移行(トランス)した生活を送る人びとや、そのような生活を送りたいと望む人びとのことである。トランスジェンダーには、服装・社会的な性・身体のどのレベルのトランスを望むのかによってちがいがあ

こうしたトランスジェンダーのひとつに、「Xジェンダー」がある。第二章では、定義が

曖昧で、それゆえに多様な性を内包する「Xジェンダー」について、いくつかのパターンを見出すことができた。これにより、ある特性をもつ「Xジェンダー」当事者が、その特性ゆえに抱える問題を明らかにすることができた。

筆者は、「Xジェンダー」当事者が多く所属するSNS内のコミュニティを調査したり、当事者たちにアンケートを行ったりして、「Xジェンダー」に関する情報を収集した。その調査から、「Xジェンダー」は、心の性が「女性」「男性」に二分できない状態のことを指すと定義した。また「Xジェンダー」のなかには「中性」「無性」「両性」というカテゴリーが存在することがわかった。しかしその三つのカテゴリーの定義は非常に曖昧なものであった。そこで筆者なりに考察し、定義を試みた。その結果、「中性」は、「女性でも男性でもあるが、それでいて女性か男性に振り切れることのない状態」、「無性」は「自身にそもそも性自認が存在しない状態」、「両性」は「女性と男性というふたつの性が内在している状態」と定義することができた。

「Xジェンダー」にもトランスのレベルの違いがあることもわかった。服装レベルであれば、ユニセックスな服装を好む場合が多い。また「両性」はそのときの気分によって「女性的」「男性的」な服装を切り替えている。最近ではユニセックスな服装やトランス的要素をもった服装が、ファッションとして認められてきているため、社会との摩擦が少なくなりつつある。また社会的な性のレベルでのトランスは、他者に「Xジェンダー」であることを理解されなくてはならないため、服装よりハードルが高い。そのため、「女性」「男性」のどちらかを選択して生活する、つまり妥協をしている当事者も多い。身体レベルでのトランスはよりハードルが高い。「女性」「男性」ではない、非典型的な身体になることを最終目的として手術を行ってくれるような医師は、おそらくいないと推測されるからである。「Xジェンダー」当事者にとって、望む性のあり方で生活することは、社会との摩擦なく生活していくことを捨てなければならないことを意味する。

では将来的に、「Xジェンダー」が認知され、社会に受け入れられることはあるのだろうか。第三章では、こうした「Xジェンダー」の展望を考察した。現状、社会の制度はいまだ性別二元制をとっているが、性別二元制が緩やかになってきている事象もある。前述した服装などがそれである。また、ジェンダーフリーとは関係なくおこった事象が、「Xジェンダー」にとって社会との摩擦を少なくすることに繋がる場合もある。障害者用トイレのような、どのような性のひとが利用しても問題がないトイレが、その代表例である。「Xジェンダー」への理解という真に望む状態ではないものの、時流の変化によって社会とのあいだで生じてきた摩擦が減り、それを「Xジェンダー」当事者が受け入れていく状態を「妥協状態」と呼んだ。また「Xジェンダー」が望む事象を、いわゆる「女性」「男性」がどこまで受け入れられるのかの妥協点を探った。

しかし「妥協状態」は真の解決ではない。「Xジェンダー」のような「女性」でも「男性」でもない存在を社会が認知するためには、どのような過程が考えられるか考察した。そのひとつとして、最近「性分化疾患」として注目を浴びている「インターセックス」について取り上げた。インターセックスは、身体の性が「女性」でも「男性」でもない状態のことを指す。インターセックス当事者から、インターセックスの子どもが生まれた場合、その子どもが思春期になって自身の性について自己決定できるまで経過を見守るべきという提言があった。この提言が採用されれば、インターセックスという「第三の性」が社会に

公に出現することになる。またインターセックスの子どもがインターセックスとして生きることを選び、それにあわせて社会の事象が「性別三元制」へと移行していったら、それは「Xジェンダー」当事者にとっても生活しやすい社会が形成されていくことになるのではないかと推測した。

しかし「第三の性」も「Xジェンダー」が真に快適な生活ができる社会への踏み台ではない。「Xジェンダー」という性が認められるようになる社会、それはあらゆる性のあり方が認められる社会なのである。

これまで、多くのセクシュアルマイノリティが権利獲得のために声をあげてきた。こうした当事者の存在が、やがてその当事者への研究をうながすことになる。また、多様な視点からの研究が進めば、社会的な認知と理解も進んでいき、解決すべき“問題”として取り上げられるようになるのである。「Xジェンダー」もこれと同様に、当事者が声をあげ、研究が進むことによって認知されれば、社会が解決すべき“問題”として「Xジェンダー」と向き合うようになる可能性がある。そして、社会が「Xジェンダー」を真に理解し、向き合おうとすれば、あらゆる性のあり方に対応できる社会とならざるを得なくなるのである。

「Xジェンダー」当事者も、少しずつではあるが、その存在を主張し始めている。この声は、やがて社会を動かすことになることを期待する。